

統合的な小説空間としての『伝奇』後期五篇

著者	木村 泰枝
雑誌名	関西大学中国文学會紀要
巻	28
ページ	A53-A73
発行年	2007-03-20
その他のタイトル	A Reading of "Chuan Qi"; Analyzing the compilation of the Later five novels into one thematic volume
URL	http://hdl.handle.net/10112/12867

統合的な小説空間としての 『伝奇』後期五篇

木 村 泰 枝

は じ め に

1946年11月張愛玲は山河図書公司から小説集『伝奇』増訂本を出版した¹⁾。

この増訂本出版にあたり、張愛玲は新しく収録した5篇に大幅な書換えを行った。また、5篇を先に発行した初版本、再版本収録の10篇の前に置いただけでなく、創作の順序に関係なく配置している。その結果、時間的には一番最後に創作した「留情」が『伝奇』増訂本の巻頭を飾ることになった。

張愛玲はなぜ5篇を並び替えて配置したのか。それは雑誌発表時には独立して発表したこの5篇に、まとまりのあるテーマで統一のある構成を与え、ひとつの小説世界に再構成しようとしたからではないだろうか。つまり、5篇によってひとつの小説空間を作り出そうと試みたのである。そして、書換えはその目的を達するために必要だったのではないかと思われるのである。

そこで本論では、「結婚」をキーワードをとって、5篇を統合的に読み解いていくことを試みてみたい。「結婚」というキーワードは、先に行った5篇の書換えの調査を基礎にして提出している²⁾。このキーワードを設定することの妥当性については2章で述べる。

本論に先立ち行った書換えの調査における、書換えられた増訂本のテキストと前段階といえる各雑誌発表時のテキストとの間の差異は、作家の内的要求がどのように作品を作り上げていったのかを表し、増訂本テキストの発生の過程を示すものであろう。本論はこの書換えの調査の成果も利用しつつ、作者の意識の側から作品の構造を見つめることで作品の内部にある構造や内律を見つめる解釈を目指し、後期5篇の大枠といえる構造をはっきりさせたい。

1. 後期5篇の解釈の仕方について

まず増訂本後期5篇の初出と増訂本で作者が取った構成について確認しておきたい。

1944年 5月『雑誌』第13巻第2期～3期「紅玫瑰与白玫瑰」、6月『新東方』第9巻第6期「鴻鸞禮」、11月『苦竹』第2期「桂花蒸 阿小悲秋」、12月『雑誌』第14巻第3期「等」、
1945年 2月『雑誌』第14巻第5期「留情」。

創作の順番だと「紅玫瑰与白玫瑰」、「鴻鸞禮」、「桂花蒸 阿小悲秋」、「等」、「留情」だが増訂本では「留情」、「鴻鸞禮」、「紅玫瑰与白玫瑰」、「等」、「桂花蒸 阿小悲秋」の順番に並べ替えてある。

次に、この5篇を創作の上でまとまりのある一群として取り上げ、論じている先行研究について述べる。

この5篇について、初版本の10篇と異なった趣を持つ創作群であることに最初に触れたのは池上貞子の「張愛玲「留情」について」³⁾で、その中で「『金鎖記』や『傾城の恋』などに代表される<奇を伝える>系譜の作品と、社会性のある、あるいは中国の研究者の多くが“平淡”と評する作品世界」とその違いを述べている。また「留情」について「いずれにせよ

個々の人物像はともかく、組み合わせ方や行動パターンには、従来の作品とは一味違った新しさ」があると述べている。はっきりと分析している段階にはないが、前期10篇と後期5篇の違いを何がしか感じとった発言といえる。

「後期5篇」という名称を正式に論文中で使用したのは邵迎建で『伝記文学と流言人生——一九四〇年代上海張愛玲の文学』の「第三章『伝奇』の世界（一）—アイデンティティの危機」⁴⁾の冒頭に「『伝奇』初版本（前出）は1943年4月から44年2月までに書かれた小説10篇を収録している。本章ではそれを張愛玲の前期小説と称し、その後、45年1月までに書かれた作品5篇を後期小説と呼ぶ。」としている。

邵迎建は、主に小説の登場人物および作者のアイデンティティという角度から作品を分析しており、分析の上では後期5篇の小説も前期の10篇と合わせた中から、アイデンティティの分析に関わる作品を選んでいる。従って邵論文の中では「後期5篇」という名称は出版の時期という違いによって分けたという程度の意味しかもっていない。「後期5篇」自体に、まとまった創作として、前期10篇との違いがあるという観点はない。

邵論文の「後期5篇」の取り上げ方を見ると「第五章『伝奇』の世界（三）—女性アイデンティティに向けて」で後期5篇の中から「紅玫瑰与白玫瑰」、「桂花蒸—阿小悲秋」を選び分析している。そして「桂花蒸—阿小悲秋」の分析の結びに「長い間探索を続けた作者がやっと一つの結果、真の女性アイデンティティを見つけた喜びの気持ちを素直に表現している。」と書き、「桂花蒸—阿小悲秋」を『伝奇』の小説世界におけるアイデンティティ到達点として指摘している。つまり、邵論文では「桂花蒸—阿小悲秋」を以って全篇の締め括りの作品と捉えていると解釈してよいだろう。

『伝奇』の作品集全体を分析の視野に入れて論じたものを見てみると、中国大陸では、于青の『天才奇女張愛玲』（復旦大学出版社 2000年）⁵⁾、宋明煒の『浮世的悲哀張愛玲伝』（上海文芸出版社 1998年）、余彬の『張

愛玲伝』(広西師範大学出版社 2001年), が張愛玲の伝記の記述と並列した形で『伝奇』の作品全体について解釈を行っている。また, 万燕の『海上花開又花落』(博士論文を出版したもの)(百花洲文芸出版社 1996年), 周芬伶の『艷異 張愛玲与中国文学』(中国華僑出版社 2003年)などの研究書がある。台湾の水晶の『替張愛玲補粧』(山東画報出版社 2004年)は, 過去の著作を再録したものだが, 「張愛玲未完」に後期5篇の小説それぞれの解釈をのせており, 取り扱われることの少ない「等」や「鴻鸞禮」についても解釈している。

これらの中で前期10篇と後期5篇を区別して考え, 両者の違いを述べているのは余彬の『張愛玲伝』だけで, 「『伝奇』のすべての小説は一年半の間に書かれたものだが, 短い時間の中に小説の外観は微妙な変化をみせている。おおまかに言うところの変化は“絢爛たる作風から平板な作風”への変化であり, ——小説の中の“奇”の要素が減少するかなくなっている。」⁶⁾と述べている。そして, 前述の池上の解釈はこの部分を参照したものである。

このことは, 大陸や台湾での研究が, 増訂本のテキストから分析を始めていること, 増訂本所収のテキストをフラットなものとして一律に見渡し, 自分の選んだ観点や角度, 理論を使用して解釈してきたことによるだろう。余彬は作品を読解する過程で, 作品を鑑賞する能力によってその差異に気付いていたが, さらに進んで「平板な作風」の構造を分析するには到っていない。

2. 「結婚」をめぐる物語

5篇を「結婚」というキーワードを用いて読むことについて, 張愛玲の創作意識と, 作家の境遇, 書換えから見える作者の心理, から検討を加えておきたい。

張愛玲は傅雷の書いた「論張愛玲的小説」⁷⁾に答える形で「自己的文

章」⁸⁾を書き、自分が描くものを「時代を超えて恒久的なもの」、「すべての時代に存在するもの」で、「人の神性」であり、「婦人性」だと述べた。この張愛玲が言っている「人の神性」=「婦人性」については、「談女人」⁹⁾の中で「超人」と「神」を比べて「超人は男性的で神は女性的な成分を帯びている。超人と神は違う。超人は積極的で一種の生存の目標である。神は広い同情であり、慈悲、了解、安息である」と述べており、女性のことを描くという意識であると考えて良からう。また、「私たちの想像の中の超人は永遠に男だ。」、「私たちの文明は男性の文明だ」、「どのような文化の段階でも女は女だ。男性はある方面に発展が偏るが、女は最も普遍的で基本的で、四季の循環、土地、生老病死、飲食繁殖を代表する」と述べて、男性の文明の中にいる女性という意識を持っていることおよび女性を描く根拠を明らかにしている。この創作意識が実際の作品に具体的にどう表れているのか、この意識と創作の間関係などは張愛玲の持つ女性観とフェミニズムの批評方法などを関連させつつ考えねばならない問題だと思うが、別の稿で論じようと思う。

女性を描くとして、女性をめぐる生活のうち出生から成長期、婚姻、出産、といったサイクルの中で女性の生存状態を大きく変えるのが「結婚」という事実は今も昔も変わっていないのではないだろうか。作家の経歴からも、この時期張愛玲が「結婚」というものに関心を寄せた十分な理由がうかがえる。5篇が雑誌に発表されていく時期、作家はちょうど胡蘭成と事実上の婚姻状態にあった。各種の伝記の記述によると1944年胡蘭成が前妻の英娣と離婚した後、8月に結婚したという。

しかしこの「結婚」は張愛玲の親友ファティマが証人となり、胡蘭成と張愛玲がお互いに結婚誓約書をしたためただけの「結婚」で、お互いの感情の他に何も保証のない「結婚」だった。張愛玲の親戚のこの結婚に対する反応を張子静が『我的姉姊張愛玲』で語っている¹⁰⁾。それは「妻子持ちの漢奸」と交際している張愛玲を非難したものだが、これに見られるよう

に胡蘭成との婚姻が正式なものではないことで周囲の公認が得られないばかりか、非難や時には蔑みの目を招いたことは想像に難くない。この私生活の上での体験が、創作に反映されているという指摘は池上貞子の「張愛玲と胡蘭成」¹¹⁾で「留情」との関連がすでに述べられている。

ところで「等」の雑誌掲載版に書き込まれていて、増訂本収録時の書換えで削除された部分に作者の影とおぼしき女性の描写がある¹²⁾。このおそらく作者自身であろうと思われる若い女性を張愛玲は「少婦」という言葉で表している。「少婦」には1)若い妻、2)若い女、という意味がある。筆者は1)の意味で使ったと考えているが、よしんば2)の意味で用いたとしても「女孩子」、「姑娘」という言葉とは違った、性的なものまで含んだ意味合いを持った語でこの女性の身分を示したことは、作者の自己認識の変化を窺わせる。周囲がどのように見ていたにしろ、張愛玲自身は確かに「結婚」して、女性として人生の新しいステージに入ったのだという自覚をもっていたと思われる。

その後胡との婚姻は破綻し、増訂本書換えの時期には、はっきり分かれたわけではないが、すでに感情の上で距離があったころである¹³⁾。しかし、どちらにしても、胡とのこの伝統的な婚姻形態から外れた結婚の状態は張愛玲に自分の境遇と重ね合わせる形で周囲の女性の結婚の状態を考えさせたに違いない。

では、後期5篇の中で張愛玲がどのような「結婚」を描いたかという観点から見てみたい。

3. 非正式の「結婚」

まず気付かされるのは、冒頭に置かれた「留情」と最後に配置された「桂花蒸 阿小悲秋」の呼応である。「留情」は中高年の再婚者同士のあ一日を描いている。しかし、この二人の“再婚”は伝統的な結婚観念や親族の承認を得た結婚からはみ出している「非正式」なものである。

敦鳳は上海で一、二を争う商家の娘だったが、16歳で結婚し23歳で夫の病死により寡婦となり、十数年の寡婦生活の後米氏と再婚する。米氏は海外留学の経験者で現在は証券会社の重役である。米氏は妻と死に別れたわけではなく、先妻と離婚して敦鳳を娶った。この離婚は現代の離婚とは概念が違い、夫の側が勝手に「停妻再娶（妻を捨てて再婚）」するもので、彼らの再婚は、結婚証書はあるもののそれが今日的な意味での法的な根拠とはなりにくい関係である。また、もちろん親戚縁者を集めて行う伝統的な「結婚」ではなく、当時の一般の中国人の考える伝統的「結婚」には入らない曖昧な関係である。この伝統的な「結婚」でないことからくる周囲の敦鳳を見る目に女主人公は心理的な圧迫を感じている。また、米氏が高齢で（再婚当時、敦鳳は36歳、米氏は59歳）もし万が一米氏が急逝でもしたら、身分の保証に加えて経済的な保証がないという現実の不安もある。張愛玲は敦鳳の「結婚」の状態を、「結婚が錯綜した」という表現で示している¹⁴⁾。

一方、「桂花蒸 阿小悲秋」の阿小をめぐる男の関係はさらに複雑である。阿小は仕立て屋をしている男と事実上結婚しているが、それは正式なものでない。彼等の子供はすでに小学校に通うほど大きいのに阿小の母親はいまだにその結婚を認めていない。阿小は性的には結婚しているその仕立て屋に帰属する身だが、本来結婚している女が夫に提供する家事労働力は雇い主である哥儿達に提供される。哥儿達は阿小に賃金を払ってその労働力を所有している。本来一組の夫婦の間で、夫が妻に生活費を渡す形で、妻の労働力と性を独占するのに対し、仕立て屋はその権限の一部を哥儿達に譲り、一方、哥儿達は賃金を払ってメイドとして阿小を雇っているが、阿小に対して夫が妻に対して抱くように性的欲望を感じてもいる。この哥儿達が阿小に欲望する描写は書換えの時に、書き直すと同時に加筆されている部分で「蘇州の女僕は勝気で、人のちょっとした顔色ががまんできない。責め立てるなんてもってのほかだ。そのうえ阿小の様子ときたら、顔

は平手打ちを喰ったようにまっかになり、まるで薄い頬の上に手の痕が一本一本浮かび上がってくるようだ。彼女の顔全部が虐待されたようになり、美しい目はまるでながく切り開かれた二本の長い筋のようで、眼の中には奥ゆかしい世界が現れ、そこには「美女」がいる」と描写されている¹⁵⁾。さらに大雨に降られて帰宅できず、阿小が子供と一緒に哥儿達のアパートの台所で夜を越す場面があるが、そこで哥儿達が阿小の下着姿の寝姿を見て「昼間の姿はなかなかだが、こうして見るとたいしたことは無い女だ。」と思って安堵した気分になる。この哥儿達の阿小を見るまなざしの中に男が女を欲望の対象としてみる時のまなざしが含まれていたことを示した部分も加筆である¹⁶⁾。また初稿からあった部分で仕立て屋が哥儿達のアパートに阿小を訪ねたとき、哥儿達がわざと阿小を呼び立てて次から次へと用事を言いつける場面があり、夫としての権限を侵害されている仕立て屋は自分を負け犬として意識している。そのことを張愛玲は「臉的下半部却不知道爲什麼坍了下来（顔の下半分がどうしたわけだか崩れさがっている）」という特殊な描写で示している。この「顔の下垂」の描写の用例はほかに「紅玫瑰与白玫瑰」の主人公佟振保が王嬌蕊をめぐって、その夫である友人の王に対して自分は負け犬だと感じている場面にも使われている¹⁷⁾。男性が女性の所有をめぐって自分が負け犬だと感じていることを示す張愛玲の独特の描写の方法である。これは、もし結婚という人間関係を「夫たる男が一人の女を養う代わりに妻として性的にも労働力としても所有するもの」¹⁸⁾と定義すると、阿小の婚姻状態も「留情」の敦鳳と同じく「錯綜」していると言えるのであり、この2篇はいずれも正式な「結婚」の外にある結婚状態を描いたものと言えるだろう。

この2編はそれぞれの結びが明るいのも同じである。「留情」では、米氏が病気にかかった先妻を気にかけて見舞いに行くことに敦鳳が腹を立てて、叔母の家に気晴らしに行く。敦鳳を叔母の家まで送った後、米氏は先妻を見舞いに行くが、敦鳳が予期していなかったほど早く叔母の家に戻っ

てくる。敦鳳は米氏の態度から先妻の死は確定的だと感じ、また米氏が今一番気にしているのは自分だという気持ちになり、結びはこれを受けている。

この世に生きていて、ほころびのない愛情なんてないだろう。そして敦鳳と米先生は家路をたどりながらやっぱり愛し合っていた。花びらのような落ち葉を踏んであるく道すがら、敦鳳は、郵便局を過ぎるとき、鸚鵡のことを米氏に話すことを忘れないようにしなくちゃ、と思うのだった¹⁹⁾。

この締めくくりの明るさは、「留情」の冒頭に火鉢に盛られた炭の比喻で、この二人の結婚生活が甘いけれども儂いものであることを暗示した部分と対照的である²⁰⁾。ここには作者自身の願望のようなものが感じられる。理性のうちでは、儂いものであると考えていても、男女の感情の上に成り立っているこの「結婚」を肯定的に支持している気分が窺えるのである。

「桂花蒸 阿小悲秋」でも、桂花蒸と呼ばれる、秋が来る前の蒸し暑い一日を過ごしてのち、次の日の早朝の風景で結ばれる結びはある種の爽快さを示している。

涼を取っていたのが去年の出来事のようなだ。棕櫚のいすは斜めに放置されて、かたかたと風に揺られている。まるで標準の中国人が上に座っているみたいだ。地べた一面の落花生の殻や柿の種と皮。タブロイド新聞が一枚、風に巻き上げられて溝に落ちて排泄口のほとりの欄干にへばりついている。阿小は下の階の様子を見て、漠然と思った。世の中にはこんなにだらしく汚しているところがあるものだ。幸いに、彼女の管轄外だ、と²¹⁾。

この小説の冒頭にはファティマの一文が置かれている。

「秋是一個歌，但是『桂花蒸』的夜，像在廚裏吹的簫調，白天像小孩子唱的歌，又熱又熱又清又濕。(秋は歌だ。だが『桂花蒸』の夜は，台所で吹かれた笛の音のように，昼間は子供が歌った歌のように，熱っぽくて，おなじみで，はっきりしていて，湿り気がある)」²²⁾ 水晶は阿小を「清潔」というキーワードで読み解き，阿小に「地母」としての性質を見ている²³⁾。この水晶の「清潔」という言葉を用いて，ファティマのこの言葉の中にある，「清」という言葉を読むと，特に阿小の人生を指していると解釈できまいか。狂ったような蒸し暑い日を舞台に語られる女僕阿小の人生は，客観的に見ると決して幸福なものではない。夫である仕立て屋は甲斐性なしで，息子の百順は勉強ができず将来への希望が見えない。雇い主の哥兒達は恪気で，私生活では女の尻を追いかけることしか考えていないプレーボーイである。しかし，このような環境の中で，阿小自身は善良で，義理堅く，仕事の上でも有能で自分の世界を秩序あるものとして運営していく能力がある。また，夫との仲もそれなりによく，夫に阿小の他に女がいるわけでもない。結びの部分は，この阿小に対する賛美であり，「留情」の敦鳳のような上流階級に属する女ではない阿小を示す括りの部分は「留情」ほど明るくはないけれども，やはり作者の肯定する意識が反映されていると感じられるのである。

4. 伝統的な結婚の中の女

次に，「鴻鸞禮」と「等」の関係を見てみると，この2篇の間にも呼応が見られる。まず，この2篇はともに伝統的な正式な「結婚」生活の中にいる女たちを描いたものである。「鴻鸞禮」は，新興中上流階級の「新式結婚式」という儀式を物語りの軸に据えて，いわば当時の新風俗の世態を描写しつつ，伝統的な，正式な「結婚」に入ろうとする若い女とその「結婚」をして何十年という無能な家庭の主婦を対照的に描いている。下にそ

の二人の描かれ方を取り上げる。

婁太太は婁鬻伯と「結婚」して30年。四人の子供をもうけるが、有能な夫に比べて、家事能力のない無能な妻として有名で「どれだけの人が婁氏に代わって不平を言ったことか」²⁴⁾、娘や息子にも馬鹿にされ、家庭での地位が低い。婁鬻伯は「有名な好い夫」²⁵⁾の名声を保つために使用人や友人の前では婁太太を尊重しているが、外に妾を作っている。腹を立てても反駁できない時、婁太太は浴室に行き、ガラガラと大きな音を立ててうがいをして気を紛らわす。

邱玉清は、没落した名家の娘で、30歳近い年齢を偽って獲得した婁大陸との結婚をあさってに控えている。両親が嫁入り用にくれた五万元でこのときばかりと買い物にあけくれる。しかし品物を判別する目がなく、結婚後婁太太の二番煎じになる予感を読者に抱かせる。

婁太太の顔は「丸くて白い顔」²⁶⁾と形容され、邱玉清も四美に「白いことは白いけれど、惜しいことに白骨」²⁷⁾と言われるようにいずれも「白」のイメージを付されている。

「等」は、按摩師龐松齡の診療所を舞台にして、龐松齡の家族、受付を手伝う龐の奥さんと娘の阿芳、按摩をしてもらいに来て、順番待ちをしている患者たち（その多くは奥さん連中）が入れ替わり立ち代り待合室や診療室で交わす会話が描かれる。この女たちの言語空間で語られる話題は、いつも自分の夫、自分の婚姻の境遇の嘆き、あるいは服などの買い物の話題で、高氏と龐按摩師、若い男と龐按摩師が時局のことを話題にするのと対照的である。

小説の核をなしているのは、夫が困っている妾に不満を持つ童奥さんと、重慶に行った夫が近頃若い現地妻を困ったのではないかと心配している奚奥さんがそれぞれ自分の境遇を相手に語る会話の部分である。二人の婚姻の状態は、(1)童奥さん：結婚して30年。舅、姑に仕え、子供を生み、毎日同じ日々の繰り返しを送ってきた。すでに舅姑は亡くなっている。生きて

いたころ舅姑はいつも童の奥さんのことを褒めていた。毎日家族のために料理を作るが、作った後手を洗いに行っている間に、夫の家族においしいものは食べられてしまっていて残っていない。夫が厄介を起こして県の役所に捕まったので、義理の娘の契りを結んでいる者のついで、大枚をはたいて釈放してもらおうと、家に帰るなり、夫は妾の部屋に行ってしまった。翌朝、童の奥さんが牢での様子を話しもしないしどうやって助け出したのか尋ねもしないとなじると、夫は誰が大金を使って助け出してくれと言った、牢屋での暮らしは快適だった、と嘯いた。

金光寺の和尚が前世の因縁で夫婦仲が悪いので夫と争うと来世も再び夫婦になって、そのときはもっと苦勞すると言うので夫のしたい放題にさせ、夫は囚に乗って家に妾を連れてきて囲うようになった。

(2)奚奥さん：もともと一緒に内地に行く予定が夫だけ先に飛行機で行き、その後交通が不通になり奚奥さんは行けなくなった。新聞によると内地では蒋介石が戦争をしていて死亡者が多いので人口を増やすために妾を囲うことを積極的に奨励しており、妾も格が上がって第二夫人と呼ばれる。奚奥さんは、夫が妾を囲うことを心配しているが夫の両親も妾ができたとしても奚奥さんが正妻で地位が上だからと慰める。

彼女たちの婚姻は、どちらも男の身勝手な欲望によって破壊されるか危機に瀕している。童の奥さんは、夫に対して牢から救出するという真情を尽くすが、夫の方はこの妻の感情をなんとも思っていない。

奚の奥さんに夫の行為を心配させる原因がタブロイド版の新聞の記事だという設定や童の奥さんに金光寺の和尚が言った内容は、世間一般に女性の感情を無視した男性の都合による言説が浸透していることを示す意図があるように窺える。さりげない描写の中で、女性をとりまく言説が男性の都合に合わせたものであり、それが女性に影響を与えていることを示している。

こういった伝統的な「結婚」に対する妻の反応を見ると、農村に暮らし

一生下女のように働いて家庭を切り盛りしてきた童奥さんの頭の中には、夫を怨む気持ちはあっても伝統の生活から抜け出すような考えは生まれなない。自分の息子たちに伝統観念を重んじる家の娘を自ら選んで結婚させたことを自慢げに話し、三人の娘を結婚させたあと自分は出家して尼になりたいと述べるだけである。

奚奥さんも夫が戻って来さえしたらすべて解決すると考え、夫が戻ってくるまでに自分の抜けてしまった髪の毛を元通りにして女としての魅力を取り戻したいと願う。

「等」の中に描かれている婚姻は夫を想う妻と、その妻を顧みず自分の欲望のままに妾を作る夫の姿である。そして世間の言論もそういう夫の側に立つというものである。

一方「鴻鸞禮」で描かれた婁太太と婁囂伯の婚姻は、「紅玫瑰与白玫瑰」の佟振保と孟烟鵬の婚姻の雛形のように見える。「白」にイメージされる妻、無能な妻、それでも夫を愛している妻、それに対して、よき夫を演じる夫、そのくせ妻には辟易して外に妾を囲う夫である。

張愛玲が見た、伝統的な正式な「結婚」の共通の特徴は妻と夫の感情の交流のない状態だといえるだろう。

5. 男の立場から見た伝統的な「結婚」

「紅玫瑰与白玫瑰」では、「鴻鸞禮」で若い娘たちが渴望した、将来有望な「結婚」の相手と考えられる男性、この男性がどのような行動原理によって自分の伴侶を選ぶのかを明らかにした物語と読むことができ、男の側から伝統的で正式な「結婚」を描いたとき何が見えるのかを探ったといえる。

佟振保は貧しい階層の出身で「ヨーロッパで学位を得て、工場で実習も積み、しっかりした学問があっただけでなく、働きながら学んでゼロから地位を築き上げ」、今では「老舗の外資染織会社で重役の地位まで登り」²⁸⁾

つめた、いわゆる“成功者”である。社会的地位ばかりでなく、「奥さんは大卒で、しっかりした家の出で、綺麗でおとなしく表に出てきたことはない。九つになる娘の大学の教育費まで準備済み、母親に仕えるのに誰もあんなにいきとどかない、兄弟を引き立てるのに誰もあんなに気を配れない、仕事をするのに誰もあんなに恐ろしく真剣になれない、友達に対するのに誰もあんなに熱心で、義理堅く、自分を抑えることはできない」²⁹⁾。どこから見ても非の打ち所がない「好人」である振保の私生活＝女性関係における不実さと偽善者ぶりが張愛玲の筆によって描き出される。

水晶は「潜望鏡下一男性——我讀「紅玫瑰与白玫瑰」」で五四新文学以降郁達夫と並んで「男性性心理」を描いた作品という観点から両者を「恋物癖 (fetish)」という概念で比較分析している³⁰⁾。邵迎建は『伝記文学と流言人生——一九四〇年代上海張愛玲の文学』³¹⁾の「第五章『伝奇』の世界 (三) —女性アイデンティティに向けて」「第三節引き裂かれた自己 (「紅薔薇と白玫瑰」)」で、エドワード・ガン (Edward M. Cunn) の「社会習慣と秩序により自己を評価する佟振保が、自分の基準で社会に認められる女性と「不義」の女性を分けようとするところに矛盾が生まれる、」³²⁾という説を敷衍しつつ、「男権社会の因習に意義を申し立てる」テキストとして読み、「私」の世界の「絶対の主人」たらんとする佟振保が、彼自身の性的欲望と「他者のまなざし」＝「社会習慣と秩序」の間で、王嬌蕊を棄て、孟烟鵬と結婚する過程を分析した。ここでは、この物語を伝統的な「結婚」という面から見てみる。

「紅玫瑰与白玫瑰」で一般的に分析の対象となるのは佟振保と王嬌蕊：佟振保と孟烟鵬＝不倫：結婚というパターンであろう。しかし伝統的な「結婚」という観点から見ると、佟振保と孟烟鵬の「結婚」の他に王士洪と王嬌蕊という「結婚」もある。王士洪と王嬌蕊の「結婚」の内実は、佟振保が王士洪の家に下宿するため引っ越した晩の夕食時の会話から窺える。「こいつのおしゃべりには構わないでくれ。まったく子供で、中国に

来て三年にもなるのにまだ慣れなくて、口の利き方も知らないんだ」³³⁾、「華僑って奴は本当にややこしい名前をつけるもんだ。」³⁴⁾等、王士洪の妻のことを友人である佟振保に語る口ぶり、妻に近づき「何の薬を飲んでるんだ。」³⁵⁾と尋ねるしぐさは、人ではなく愛玩物を可愛がるような態度である。王嬌蕊も王士洪と「結婚」したいきさつを語る場面で、結婚相手を探すためにイギリスに留学していて、何年か遊んでいるうちに評判が落ちてきたので「焦って掴んだのが士洪だった」³⁶⁾と述べている。男のほうは可愛い飾りになる女を娶り、女のほうは美貌と名声があせないうちに適当な、経済力のある男を選ぶ、という「結婚」をした王嬌蕊は、不倫相手の佟振保に本当の愛情を生じるのである。しかし佟振保は愛情というものを知った王嬌蕊を棄て世間体の申し分のない孟烟鵬と感情のない伝統的な「結婚」をする。「結婚」後、孟烟鵬を家庭で地位のない無能な妻にしていく過程は、どうやったら「鴻鸞禮」の妻太太のような無能で孤独な専業主婦を製造できるかを克明に述べた観がある。もちろん、孟烟鵬にもともと自分の主張を持たない、という素地があったにしてもである。やがて佟振保も他の作品中に出てくる伝統的な「結婚」の中の夫と同じく、外で女を買い始める。

振保が嬌蕊とデートに出かけて艾許婦人とその娘に出会う場面は、増訂本収録に当たって大幅に書換えられた部分である³⁷⁾。そして「紅玫瑰与白玫瑰」の書換えの箇所のうち最も重要な場面である。なぜならこの書換えによって、張愛玲は振保は艾許婦人とその娘、嬌蕊、自分の境遇を比較し社会の中で自分の立場を再確認したのであり、嬌蕊を決定的に疎ましく思う契機を描いた。振保が社会の規範、自分の地位について顧み、結婚相手を判断する重要な部分である。

張愛玲は「紅玫瑰与白玫瑰」の佟振保と孟烟鵬の婚姻の中で伝統的な「婚姻」の場合男の側に感情がないことを描き出したが、さらに振保の妻というものに対して持っている女性観の歪みも示した。女の子を生んだ孟

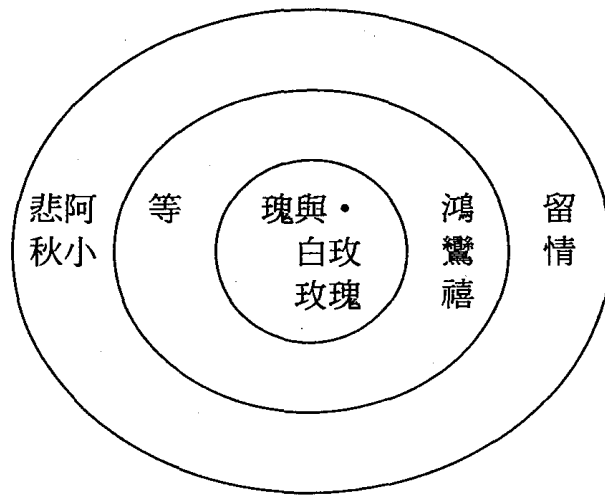
烟鵬が子供を生んだのだからそれくらいは権利があると母親にたてついたとき、母親が男の子を産んでないからと譲らなかった騒動で、従順でないと烟鵬に幻滅する場面である。また、烟鵬の不貞を知ったとき「俺はあいつを大事にしてやったじゃないか！ 愛しじゃないが、しかしどこもあいつにすまないことなどしていない。」³⁸⁾ と思う場面では、一番大切な愛情を与えていないという事や自分が外で女を買っていたということが妻に対する裏切りであるとは思えない。振保には自分が妻に苦痛を与えているという自覚がないことを示している。

「紅玫瑰与白玫瑰」によれば伝統的「結婚」では、男は自分の世間体や地位というものによって妻を選ぶのであり、愛情によってではない。妻となる女性は、男が金持ちの場合は外見の美貌で選ばれるが、中程度の経済力だと従順であるという基準で選ばれる。そこで伝統的「結婚」の夫と妻の間には本心からの交流がなく、妻は夫に無能として扱われ（王士洪と王嬌蕊の場合も士洪は嬌蕊を美しいが頭のないペットのようなものとして見ているに過ぎない）家庭内での地位が低く、孤独である。そして、夫は自分に問題があるという自覚がないのである。

結 語

後期5篇を「結婚」というキーワードで読んだとき、その立体構造を図示すると、下のようになる。

張愛玲は、「留情」と「桂花蒸 阿小悲秋」で、伝統的な、正式な「結婚」から外れた結婚を描き、次に「鴻鸞禮」と「等」では反対に伝統的な「結婚」のなかの女性を描いた。最後に、伝統的な「結婚」の相手である男性の目から、逆照射した形で伝統的「結婚」を描いた。この三種類の「結婚」からなる小説群は、どこから始まってどこへ到達したというものではないのではないかと思う。張愛玲の中では、この三種類の「結婚」状態がそのまま彼女の意識した「人」の世界＝「女性の世界」そのものである。



ったのではないだろうか。

伝統的「結婚」の中にいる女性は、自身は夫を想うが夫と感情の上で交流がなく、夫である男性は大抵妾を囲っている。忍従の中に生きる妻は、舅姑といった周囲からは承認を得て肯定されている安定感がある。伝統的「結婚」とは逆に、伝統的でない、正式でない「結婚」は常に不安定である。しかし感情の上ではつながりがあり、「留情」、「桂花蒸 阿小悲秋」の結末には作者のこのような「結婚」を支持するような意識が窺える。感情のない伝統的「結婚」を肯定しない作者が、その結婚の当事者たる男性に容赦しないのは当然で、張愛玲自身が「この物語を書き終わったとき、佟振保と白玫瑰にととても申し訳ないと思った」³⁹⁾と後で語ったほど、「紅玫瑰与白玫瑰」の主人公佟振保の結末は哀れである。

自分の感情を裏切り、社会的な規範に従い体面と実益を守るために伝統的で保守的な女を選んだ佟振保に対する作者の処遇の冷たさは、「留情」、「桂花蒸 阿小悲秋」に見える感情のある「結婚」を肯定する意識と表裏一体のものであろう。

張愛玲のいた上海は中国が西洋の圧力によって開国し、国際化（地球化）してゆく過程の中の当時としては最先端の場だった。そこでの婚姻が、もはや清朝以前の閉じられた社会の婚姻状態のままではいられないはずはない。

張愛玲は「自己的文章」の「連環套」を書いた動機について語った部分で「現代人はみな疲れており、現代の婚姻制度もまた不合理なものである。」⁴⁰⁾と述べている。5篇の構成から、張愛玲の心には12世紀のフランスで「宮廷風恋愛」が生まれ、正式な婚姻関係の外にこそ真実の愛があったように⁴¹⁾、人間のこころを満足させる「愛情」に基づいた婚姻の状態を探求する気持ちがあったのだと考えられるのである。

注

- 1) 小説集『伝奇』は、張愛玲が中国大陸で1940年代初頭に創作した初期の小説の集大成と言える。『伝奇』が一定の体裁を整えていく過程を見ると、まず1944年8月に初版本が出版され、その後すぐに再版本が出ている。この時収録されたのは代表作『金鎖記』を含む10篇のみ。その後、抗戦勝利を経た1946年11月、初版、再版本出版後に各雑誌上で発表した5篇を加えた増訂本が出版された。この時の体裁は巻頭に「有几句話同読者説」を置き、先に新しく加えた5篇を、その後に初版本、再版本に収めた10篇を配置し、後記にあたる部分に「中国的日夜」を配している。後に香港や台湾で『伝奇』は小説集のタイトルを変えて出版されるが、その際も収録の体裁、内容等は46年の版に従っており、作者自身にとってこの増訂本は初期に作者が追求した小説世界を体現する決定版であったと考えられる。
- 2) 拙稿「張愛玲小説集『伝奇』増訂本に加えられた5篇の小説の書換えについて」(関西大学大学院文学研究科 千里山文学論集 第75号 2006年参照)
- 3) 池上貞子「張愛玲「留情」について」『共栄学園短期大学研究紀要』11号 1995年
- 4) 邵迎建「第三章『伝奇』の世界(一) —アイデンティティの危機」『伝記文学と流言人生——一九四〇年代上海張愛玲の文学』御茶の水書房 2002年 p71
- 5) これは1991年花山出版から出した同名の本の改訂版である。
- 6) 余彬『張愛玲伝』広西師範大学出版社 2001年 p131
- 7) 傅雷「論張愛玲の小説」『万象』第3年第11期 1944年
- 8) 張愛玲「自己的文章」初出は『新東方』第9巻第4,5期合刊 1944年、ここでは『流言』皇冠出版社 1986年(第15版) p20を使用
- 9) 張愛玲「談女人」『流言』皇冠出版社 1986年(第15版) p84, 85 参照

- 10) 張子静「我舅舅听说姊姊交了固男友是漢奸——」『我的姊姊張愛玲』1997年 p161 参照
- 11) 池上貞子「張愛玲と胡蘭成——“漢奸”をめぐる」『文学空間』復刊第9号 1987年 p81 参照
- 12) 「等」『雑誌』第14卷第3期（1944年12月）掲載テキストの「現在被推拿的是先一直悄悄坐在屋角的一個少婦，箱細了的高弔的眉毛，坐得畢直，帶着崇高的表情讀「萬象」。現在她臉朝下躺在診台上，旗袍擄了上去，露出青地大白花的布袴，一截黃腰，腰上一根窄窄的白帶子，不知什麼時候繫了上去忘了拿下來的。奚太太立在門口看了一眼，無聊地又回到原來地座位上。」は、増訂本テキストに書換えられる過程で削除された。
- 13) 張愛玲と胡蘭成の婚姻關係については、于青『天才奇女張愛玲』復旦大学出版社 2000年 p178-209，宋明煒の『浮世的悲哀張愛玲伝』上海文芸出版社 1998年 p158-190, 208-213，余彬の『張愛玲伝』広西師範大学出版社 2001年を参照
- 14) 張愛玲「留情」『伝奇』増訂本山河図書公司 1946年 p16 参照
- 15) 張愛玲「桂花蒸 阿小悲秋」『伝奇』増訂本山河図書出版 1946年 p21 参照「蘇州娘姨最是要強，受不了人家一點點眉高眼低的，休說責備的話了。尤其是阿小生成這一副模樣，臉一紅便像是挨了個嘴巴子，薄薄的面頰上一條條紅指印，腫將起來。她整個的臉型像是被凌虐的，秀眼如同剪開的兩長條，眼中露出一個幽幽的世界，裏面「沉魚落雁，閉月羞花。」
- 16) 張愛玲「桂花蒸 阿小悲秋」『伝奇』増訂本山河図書公司 1946年 p27 参照「她只穿了件汗衫背心，條紋布短袴，側身向裏，瘦小得青蛙的手與腿壓在百順身上。頭上的兩隻蒼蠅叮叮的朝電燈泡上撞。哥兒達朝她看了一眼。這阿媽白天非常俏麗有風韻的。卸了裝却不行。他心中很覺得安慰（彼女は袖なしの肌シャツを着て，縞模様うの短パンを穿いて，横向きに寝て青蛙のようにやせた腕と足を百順の上にのせていた。頭上では二匹のハエがチンチンと電球にぶつかっていた。コールドは彼女を見た。この女中は昼間はとても秀麗で優雅な趣がある。だが舞台衣装を脱いだらだめだ。彼は心の中で大変慰めを得た。）」
- 17) 張愛玲「桂花蒸 阿小悲秋」『伝奇』増訂本山河図書公司 1946年 p101 および張愛玲「紅玫瑰与白玫瑰」『伝奇』増訂本山河図書公司 1946年 p55「振保臉上就現出黯敗的微笑，眉梢眼梢往下挂，整個的臉拉雜下垂像拖把上的破布條。（振保の顔にすぐ敗残の微笑が浮かび，眉尻も目尻も下にさがり，顔全体がモップに付いている雑巾のようにだらしなくさがった。）」 p55

- 18) ここでの 婚姻に対する定義は上野千鶴子「第四章 家父長制の物質的基礎」『家父長制と資本論』岩波書店 1990年を参照した。
- 19) 張愛玲「留情」『伝奇』増訂本山河図書公司 1946年 p21
- 20) 張愛玲「留情」『伝奇』増訂本山河図書公司 1946年 p 1 参照「小さな火鉢の白い灰の中に紅の炭が盛ってある。炭ははじめ樹だったのが後に枯れて、今その身に紅の火を通して、また生き返ってきた。しかし、生きてはいてもすぐに灰に変わるのだ。炭の初めの生命は緑色で、二つ目の生命は暗褐色である。火鉢は炭の匂いがしている。棗を一つ落としてしまったのが焼けて臘八粥の甘い香が起った。炭はかすかにカサコソとはじけて、氷の削り屑のようだ。」とある。
- 21) 張愛玲「桂花蒸 阿小悲秋」『伝奇』増訂本山河図書公司 1946年 p109
- 22) 張愛玲「桂花蒸 阿小悲秋」『伝奇』増訂本山河図書公司 1946年 p90
- 23) 水晶「在星群里也放光——我吟「桂花蒸 阿小悲秋」大地出版社 1985年（第7版）p57-60, 『替張愛玲補粧』山東画法出版社 2004年 p43, 44 参照
- 24) 張愛玲「鴻鸞禮」『伝奇』増訂本山河図書公司 1946年 p27
- 25) 同上 p26
- 26) 同上 p26
- 27) 同上 p22
- 28) 同上 p37
- 29) 同上 p36
- 30) 水晶「潜望鏡下一男性——我讀「紅玫瑰与白玫瑰」」『張愛玲的小説芸術』大地出版社 1985年（第7版）p101, 『替張愛玲補粧』山東画法出版社 2004年 p74 参照
- 31) 邵迎建「第五章『伝奇』の世界（三）—女性アイデンティティに向けて」「第三節引き裂かれた自己（「紅薔薇と白玫瑰」）」『伝記文学と流言人生——九四〇年代上海張愛玲の文学』御茶の水書房 2002年 p136-154
- 32) Edward M. Cunn, Jr “UNWELCOME MUSE Chinese Literature in Shanghai and Peking 1937-1945” Columbia University Press 1980 p 208-212
- 33) 張愛玲「紅玫瑰与白玫瑰」『伝奇』増訂本山河図書公司 1946年 p44
- 34) 同上 p45
- 35) 同上 p44
- 36) 同上 p50
- 37) 注2に同じ p215, 216
- 38) 張愛玲「紅玫瑰与白玫瑰」『伝奇』増訂本山河図書公司 1946年 p72

- 39) 水晶「蟬——夜訪張愛玲」『張愛玲的小説芸術』大地出版社 1985年（第7版）p26, 『替張愛玲補粧』山東画法出版社 2004年 p20 参照
- 40) 張愛玲「自己的文章」初出は『新東方』第9卷第4, 5期合刊, ここでは『流言』皇冠出版社 1986年（第15版）p24
- 41) 高頭麻子「恋愛文学史海外編」『恋愛小説の基礎』学習研究社 1993年参照